

2011 年 1 月 12 日

## 第 168 回

### 『TPP 反対の大義』を読み、感じたこと、考えたこと、そして提案したいこと ——時間軸と空間軸の基本視点に立ち返る——

皆さん、明けましておめでとうございます。今年も、原則、毎週この欄を書いていくつもりでいますので御愛読頂くだけでなく、御意見も頂ければ有難いと存じます。

今年は 1 月 4 日の年始の会にあたり、立場上、2 つの場所で年頭のあいさつを述べざるを得ない破目になりました。午前は J C 総研の研究所長として、午後は農文協の理事として農文協全職員を前に。J C 総研の方は時間の制約で短く、農文協の方は若干時間を頂けたので、二つの会合で述べた趣旨は同じなので、農文協で話した記録が取られていたのでそれをもとに再現してみたいと思います。

#### ◆ 『TPP 反対の大義』を読む

『TPP 反対の大義』は昨年の大晦日に届きました。早速読ませて頂き、宇沢弘文先生以下の論文を息もつく間も無いというような調子で読ませて頂き、それぞれの論文のきらりと光る個性とその主張と理論の展開に感銘を受けました。と同時に、短期間のうちに、よくぞこれだけの先生方に書いて頂き、しかも年内超多忙の中でこれだけきちっと、ブックレットとは言え本にできたと思いました。編集・出版を担当された皆さんの努力を高く評価したいと思います。

そういうことも踏まえて、この『大義』を農村の皆さんや農協、市町村自治体など農村地域の皆さんだけでなく、消費者をはじめとする国民の皆さんに広く読んで頂けるよう努力をするとともに、私もこの本が広く読まれるようその普及に努力したいと思っています。僅か 840 円、タバコ 2 箱分、ビール一本分です。

#### ◆ 時間軸という基本視点で考える

そこで、これから先はこの『大義』の諸論文で書かれていないこと、書いて頂きたかったことを、私なりに述べてみたいと思います。

それは、まず時間軸という視点からの感想です。

確か 17 年前の 1993 年 12 月だと記憶していますが、細川内閣の時にガット・ウルグアイラウンドの受諾をいたしました。米の部分開放を受け入れました。その時と今日の不安定な政治状況が非常に似ています。当時は『ガット・ウルグアイラウンド反対の大義』という本は出ませんでした。反対運動は随分盛り上がりました。しかし、細川内閣は受諾しました。ただし、前回は米の部分開放でしたが、今回は農畜産物すべての全面自由化ということで、決定的に違います。ところで細川内閣により、何と翌年の予算で「ウルグアイラウンド農業合意関連国内対策事業費」として 6 兆 100 億円が組まれました。おそらく政策受諾の対価として農村をなだめるために、要するに金をバラまいたのでしょう。そのほとんどはいろいろな建物や施設に使われました。土地改良や水利施設の改善などをやったところも幾分あったでしょうが、多くは建物など目に見える構築物になったのではないかと思います。その結果がどうなっているかを私は可能なかぎりあちこち農村を訪ねるたびに見たり聞いたりしているのですが、多くは朽ち果てているか使っていない、ただ残骸だけが多くの所ではむなしく残っていました。心を傷めています。

いったいガット・ウルグアイラウンド反対の大義はどこへいったのだろうかという疑問がずっと胸の底に残っていました。喉元過ぎれば熱さ忘れるでは全く困ります。今回、そのことを頭に置きながら、『大義』を読みましたが執筆者誰一人として、そのことに触れていませんでした。ガット・ウルグアイラウンドはわずか 17 年前です。時間軸という基本視点に立った論稿が無くて残念だと思いました。これが一つ。

これに関連しますが、私の研究所に柳京熙君という韓国出身の研究員がいます。彼が『T P P 反対の大義』の中で韓米 F T A のことを中心に書いています。大変すぐれた論稿です。アメリカとの自由貿易協定を結んで韓国農業はどうなるかとしているのか、その基本論点と動向や影響の実態と予測と分析をしています。とも角、先行事例で大変参考になるので読んでみて下さい。

この論文には書いていなかったと思いますが、私が韓国に行った折聞いたところでは、日本円にして 9 兆円の予算を組む予定でいるそうです。「韓国は日本のガット・ウルグアイラウンドの真似をしているんですか」と聞いたら、「韓国は韓国流でやると思います」と言っていました。9 兆円がどういう中味かよく判りません。しかし、日本はそうあってはならないと思っています。

17 年前というのはついこの間のことですが、ウルグアイラウンド対策で講じられた施策は先程述べたような状況です。

これは何だったのか、ということを考えなければならないと思います。

私どもは常に基本視点の一つである時間軸を踏まえ、歴史を踏まえながら 5 年 10 年先の将来、あるいは 20 年先を見通しながら、何をやるべきか、腹を据えて考えなければならないのではないのでしょうか。

#### ◆ 空間軸という基本視点から考え実践する

そういうことも踏まえていま一つ提案したいことがあります。空間軸といういま一つの基本視点です。

なお『大義』では、空間軸の視点に立った論稿は、地域団体の方々からの寄稿を除けば小田切徳美論文が地域を踏まえて——高知の山村を踏まえて——書いてあるのと楠本雅弘論文が集落営農を踏まえて書いているのと二つだけだったと思います。

私は、J C 総研で「所長の部屋」というのを原則毎週書いていますが、その第 164 回と 165 回を読んでいただきたいと思います。164 回では、アグロポリス・エコポリス・メディコポリスの三つを中心にした新しい農業・農村の拠点を作ろうという提案で、165 回は中国・江蘇省・句容市の戴荘村での戴荘合作社のことが書いてあります。とりあえず読んでみて下さい。

さて、ポリスというのはギリシャ語から取ってきていますが、「都市」という意味です。しかし、「拠点」と言い換えてもいいでしょう。「農業拠点」、「環境拠点」、「医療拠点」ということです。しっかり各地域で将来の展望をもった農業の仕組みづくりを持った拠点づくりをしているか。また、拠点の構成員はどうなのか。水、川、山、もちろん住んでいる所や里山まで含めて環境や伝統文化まで踏まえたエコポリスの拠点をどう作るのか。さらに、医療・介護などまで含めた医療拠点、メディコポリスをどう作るのか。

農業の生産のあり方、環境のあり方、人間の生存条件としてのあり方、この三つを充足する地域づくり、拠点づくりの三段重ねの構想を考えただけです。もっと判りやすく言えば、医・食・農・環境ということですが、人間の生存に不可欠なことです。

この構想は、私が全国各地を足で歩き、実態調査をする中から優れた先進的活動をしている J A や先進的農業経営者やその集団、あるいは多彩な集落営農、あるいは農業の 6 次産業化を進めている女性活動集団、農産物直売所、さらには佐久総合病院とそのネットワークなどの医療・介護システムなどの調査の中から、その本質を取り出しつつ考えたものです。まだ、未熟なところもありますが、いずれもう少し判りやすく展開する努力を重ねたいと思っています。

ところが、残念ながらアグロポリスと言われる農業の拠点が、なかなかできていない。その第一に中心となるべきは農協（JA）のはずですが、地域に腰を据え着実にやっているのは非常に少ない。「所長の部屋」の160～164回などに紹介したJAなどは立派に「拠点」づくりをしています。全国的に見れば非常に少ない。農協大合併で「地域」とは離れてしまった。例えば、県一本の農協になった大分、私の郷里は大分ですがJA大分県があります。色々な事情はあったのですが、県一本の農協で、県一本の農業拠点などありえないわけです。大分県農協に加わらなかった、例えば大山町農協は山の中です。けれども敢然として農協として生きていますし地域農業もしっかりしています。まさしくアグロポリスを形造っています。農業の6次産業化の発祥の地が大山町農協で、私はここで調査し、勉強する中で「農業の6次産業化」という概念を今から17年前に考えついたわけです。そういう意味で地域に根ざした農業、また環境もそうですし、医療もそうです。

そこで、医療、メディコポリスのいいものを作れば、今まで中山間地域から都市へと流れた人の流れが、東京という砂漠地帯からメディコポリスをめざしてもどってくるという流れに変わってくるのではないのでしょうか。佐久総合病院とそのネットワークはまさにメディコポリスです。

さらに、メディコポリスを新しく創設し実践しているJAと地域もでてきていることを昨年末に訪ね、知りました。それは、山梨県の梨北（りほく）農協です。ここは自分の力で病院を作っています。関連するケア施設、いろんなレベルの関連施設も作っていました。ここは農業生産も環境保全型の農業を徹底して進め、標高350mから1,100mの標高差を活用して多彩な農業をやっており、農産物直売所も4つあるが、いずれも活況を呈していました。アグロポリス、エコポリス、メディコポリスの実践・先進事例に昨年末接することができ目を見張りました。とりわけ感心したのが、JAの常務理事がすぐれた、優しいがてきぱきとした女性であったこと（全国で女性の専務・常務理事は僅か5人しかいない）。農業新規参入希望の青年・中堅が3人もでてきていること（1人には会えて話が聞けた）など、いずれこの欄で紹介したいと考えている。

#### ◆ Top・Down から Bottom・Up 路線へ

以上あげたような先進的な拠点をどういうふうにつけていくか。これまでの農政のTop・Down路線ではなく、つまり中央集権的画一型農政路線ではなく、自分たちはここまでやるぞという明確なそれぞれの地域の青写真と実行体制を作り、それに必要な政府支援を行うのは当たり前だろうという精神、つまり

Bottom・Up 路線、言い替えれば地域提案型創造的農政こそが基本だと私はこれまでも主張してきましたが、その道はなかなか稔りませんでした。しかし、経営所得安定政策という全国展開の基本路線（その内実はなお検討すべき点は多いが）と合わせて、三つのPolis 作りに示されるような Bottom・Up 路線を追求してもらいたいと思います。

もちろん、言うまでもなく私はTPP 反対は貫き通しますが、たとえTPP があるが無かろうが、どうかたちの地域の農業、農村の新時代にふさわしい拠点を作り上げていくかが私どもに課せられた課題であるし、その方向を解明していく手助けをすることが、少なくとも私の今年1年の課題だと考えています。農文協の皆さんもそういう観点に立ち現場に足を降ろした着実な活動を今年も展開して頂きたいと存じます。少し長くなりましたが新年のあいさつと致します。

#### ◆ 追記——TPP は日米安保問題と関連してとらえなくてよいか？

TPP 問題を正月休みに『大義』を読みつつ、単なる環太平洋経済協力問題にとどまらず、その本質と背景には普天間問題、北朝鮮・韓国問題、対中国問題等を背景にしつつ、日米安保改定問題、アメリカの環太平洋軍事戦略構想とどうかかわっているのか、非常に気になっている。いずれ、この視点からの研究も進めなければ、と考えている。

また、最近の国際的な穀物危機による価格の高騰、穀物在庫の急減、さらには世界の飢餓人口の増大など、食糧をめぐる不安定要因、不確定要因が増大している。また、東アジア米備蓄安定供給システム（本欄第45回～52回参照）などとTPP との関連などについても更に研究を進めたいと考えている。